アウクスブルクと尼崎市における水資源の活用について

江川　佳央里

1.　はじめに

令和８年８月 29 日から同９月８日にかけて、ドイツ・アウクスブルクにおいて青年使節団員として活動した。

本稿では、その経験を活かし、アウクスブルクにおける水資源の活用にかかる歴史と現代での観光との関わりについて整理するとともに、同様に豊富な水資源を有する尼崎市における都市計画を検討するものである。

2.　アウクスブルクおよび水管理システムについて

（１）　アウクスブルクとは

アウクスブルクは、ドイツ連邦共和国・バイエルン州に位置する郡独立市である。市の名はローマ皇帝アウグストゥスが植民都市を築いたことに由来し、ロマンチック街道で最古の歴史を誇る街としても知られている。

日本とは、昭和 34 年に尼崎市及び滋賀県長浜市と姉妹都市提携を締結した[i]。その友好の証の一つとして、アウクスブルク市内には尼崎市及び長浜市の名を冠した幹線道路がある（写真１）[1]。



（写真１：ショッピングモールの立体駐車場にて。出口の案内として「尼崎通り」が示されており、現地での認知度が伺える。）

（２）水管理システムについて

アウクスブルクの旧市街[2]は、水資源が豊富なレヒ渓谷より 12ｍも高い場所にあった。そこで、街では 15 世紀初頭に給水塔を建築された。主に飲料水として使用された綺麗な水は、ピストン式の往復ポンプによって高架の水槽タンクまで揚げられ、そこから自然流下式に木製の水道管を通って市内に供給された[ii]（写真２、写真３）。「アウクスブルクは水の力で水を揚げた」といわれる、給水システムを構築したのである。

興味深いのは、都市域を流れる２

---

[1] 余談であるが、ドイツ語で「道」を指す言葉は３つある。規模の順に最も大きいものから“Allee“、”Straße“、”Gasse“となり、Amagasaki Allee は主要道路を意味している。

[2] 研修当時ツアーガイドが「上の街」と称した、市庁舎をはじめとする宗教施設や有力者の居住地等が立ち並ぶエリアを指す。対して、水路が張り巡らされ手工業者等の居住区や路地のあるエリアは「下の街」と呼ばれている。

本の川から流れ込む水は用途に応じて地下の暗渠で明確に分かれ、市街地に給水されていたこと。都市の南側には豊かな湿地帯があり、そこからの湧水はブルネンバッハ川を通じて上述の飲料水として利用された。また、全長約 23 ㎞あるレヒ川及び全長約 14 ㎞のヴェルタッハ川はそれぞれ工業用水として供給され、約 89 ㎞の運河網を形成した[3]。その結果運河沿いには水力や水そのものを利用した手工業が発展し、市内散策では市内唯一の伝統的な製革工場の外観を見学することもできた。





（写真 2（左）：給水システム模型。市内には、揚水高度が 25ｍを超える給水塔もある。写真は Kleiner Wassertrm 内）

（写真 3（上）：当時の木製水道管。同給水塔内）

（３）現代の都市計画において

現代では、令和元年にユネスコ世界有形文化遺産に登録され、当時の革新的な技術と都市景観を今に伝えている[iii]。

また、同市には水資源技術の象徴として 15 世紀に建造された複数の大噴水があったり、運河の入り口付近にカヌーコースが作られるなど、市民憩いの場所としても現在も活用されている。

３．尼崎市での活用

ここからは、アウクスブルクでの経験や事例を踏まえながら、尼崎市の都市計画について検討する。

なお、アウクスブルクの運河は市内全域に張り巡らされているが、それぞれの流れは矮小であり、尼崎市が擁する大規模な運河とは単純比較することができない。そこで、実際に街を探索した経験に基づく検討を行う。

（１） 実際に歩いて感じたアウクスブルクの街並み

[3] ツアーガイド曰く、アウクスブルクの運河に架かる橋の数はヴェネツィアの運河に架かる橋より多いとのこと。

https://wassersystem-augsburg.de/en/river-city も参照。

前述のとおり、アウクスブルクの運河は町中に流れており、路地を歩くと流れる水音が涼やかで心地よい。また、流れがあり水が停滞することがないためか、水路の底が見えるくらいきれいな水が流れている。これにより、自然と足を先に進ませる効果が感じられた。また、古い町並みが往時と変わらない形で残されており、アウクスブルクの歴史的な魅力が一層引き立てられている（写真４）。

加えて、運河にはところどころにアートが見受けられた。写真はその一例である（写真５）。これは「AUGSBURGER WASSERFAHRRAD」といい、自転車のペダルが流れる水によって動く仕組みで、令和３年のアートウォークの一環で設置されたものである。実施者は旧市街協会の会長とのことで、当初は一時的なインスタレーションとして展示されていたが、現在も市民に愛されるアートとして、レヒ運河の人気スポットとなっている。[iv]





（写真４（左）：運河と共生する街並み）

（写真５（右）：「AUGSBURGER WASSERFAHRRAD」この自転車は、レヒ運河を止まることなく走り続けている。）

（２）尼崎市における運河と観光

さて、尼崎市にも運河がある。尼崎市の南部、臨海地域に位置し、全長は 6.9km。運河の原型は近世の水利施設にあるとされ、尼崎港を中心とする阪神工業地帯の核として知られている。また、海抜の低い尼崎市においては遊水地として働くなど、防災機能としても市民生活に根差している。

現在、尼崎市では、運河の活用として「21 世紀の尼崎運河再生プロジェクト基本計画」を策定し、運河の新しい価値を見出し、持続的発展可能な 21 世紀の環境先進都市の創造をめざしている。具体的には、市民に運河を身近に感じてもらう体験としてボランティアによるキャナルウォークや児童、生徒向けの環境学習会、パドルボートの体験会を開催し、好評を博している。[v]

また、尼崎運河や庄下川に沿って遊歩道が整備されている。しかしながら、例えば庄下川公園沿いの遊歩道は植木によって運河側の見通しが悪い状態であること、アスファルトの道路が単調な景色であること、立派な運河であるがゆえに岸が無機質であることが運河の魅力を語る上での課題となっている。

（3）住民参加型の遊歩道整備の提案

そこで、この遊歩道の活用を、上記基本計画に基づき、子供から高齢者までの多様な年齢層に利用してもらう方策として、市民参加型の遊歩道整備計画を提案する。具体的には尼崎運河の遊歩道の路面デザインを市民から募る、あるいは実際に装飾を施すことにより、多くの市民が愛着を持てるようなウォーキングコースとしての再生を図る。

（4）日本での先行事例

近年の日本においては類似の取り組みが先行して実施されている。以下はその例である。

1．　Fitness City プロジェクト「歩きたくなる歩道」（福岡市博多区）[vi]

2．　美しが丘　100 段階段プロジェクト（神奈川県横浜市）[vii]

3．　雑司が谷　人優先道路プロジェクト　（東京都豊島区）[viii]

中でも上記 3 の取組みについては、路面装飾における住民参加がもたらす効果について研究がなされており、当該道路の歩行者は住民のデザインであることを知る前後で道路や路面装飾に対する愛着に有意差がみられ、受容性についてもゆるやかに高まった可能性が示されている。また、同研究内アンケートには、道路のデザイン検討を住民主体で行うことに対して地域への愛着が増加する旨の回答も見受けられ、路面装飾における住民参加が参加者以外の住民にとってもポジティヴな影響を与えているといえる。

以上のことから、尼崎市内の遊歩道においても住民参加型の路面装飾を活用することで、市民の積極的な市政参加や愛着形成を見込め、今よりさらに地域住民に愛される街づくりが可能になると考える。その際、①のようにデザインのテーマを「歩く」とすることで、運河沿いを自然と歩きたくなるような遊歩道を目指し、尼崎運河を中心とした市民の健康づくりや観光ルートとしての役割も果たすことが期待される。

４．終わりに

本稿の背景の一つに、本使節団の面接で尼崎市青年使節団長より「尼崎市は外国人住民も多く、共生は課題の一つである。今回の派遣をもって尼崎市に貢献できることは何か」と尋ねられたことがある。派遣中、私はこの質問を考え続け、上記のとおり一つの結論を導いた。派遣中に視察した施設の中にはぜひ日本でも生かしたいと思うシステムもたくさんあったが（例えば、渡航記でも触れた Ausbildung など)、実際の政策に落とし込むには法制度の整備や費用の確保が不可欠であり、なかなか現実的ではなかった。その点、本提案のメリットは、全国に先行実施自治体が存在し、大きな設備投資等が不要で、住民参加が得られやすい点にある。なかなか初回から外国人の参加は難しいだろうが、参加者を小学生にすることで、外国にルーツを持つ児童・生徒のアイデアを組み入れることから始め、在住外国人にとっても受け入れやすい路面を実現できるのではないかとも考える。

現在尼崎市は、「住みたいまち」、「住み続けたいまち」、そして「住んでよかったまち」を掲げている[ix]。「住んでよかったまち」の定義は人それぞれかと思うが、私にとっての「住んでよかったまち」とは単なる利便性や安全性に留まらず、日々の居心地のよさにあるとも感じている。本稿が、尼崎市民にとってより居心地のよい場所作りの一助になれば幸いである。

---

[i] https://www.city.amagasaki.hyogo.jp/kurashi/kokusai/004simaitosi/1042408/index.html

[ii] https://www.jstage.jst.go.jp/article/shsww/270/0/270_64/_pdf/-char/ja

[iii] https://whc.unesco.org/ja/list/1580

[iv] https://www.augsburger-altstadt.de/entdecken/sehenswuerdigkeiten/fahrrad/

[v] https://web.pref.hyogo.lg.jp/hsk07/hs04_6_000000004.html

[vi] https://100.city.fukuoka.lg.jp/actions/4818

[vii] https://100dan-kaidan.org/

[viii] https://www.jstage.jst.go.jp/article/reportscpij/24/4/24_729/_pdf

[ix] https://www.city.amagasaki.hyogo.jp/shisei/sogo_annai/index.html